
英文作成法論考

齋藤誠毅

1. グラコンと英作文

1960年代半ばに都立の高校に勤めていた頃のことだが、新年度の英語科目の分担を決める際に必ず最大の関心を集めるのが、当時の呼び名で言えば「作文」という科目であった。作文には2種類ある。一つは文法と抱き合わせのGrammar and Composition (通称グラコン)、もう一つは和文英訳である。前者には文部省による検定教科書があり、いわゆる「文法科目」として扱うのが通例で、こちらは敬遠されるどころか争って担当を希望するのが実情であった。一方和文英訳 (通称英作文) の方は、副読本の形式の教科書があつて、一応文法項目を中心とした配列となっていたが、目標はあくまで徹底した和文英訳であった。

グラコンが英語教師の間で奪い合いになるほど人気があつたのは、内容が徹底した文法指導であつたからである。教科書は、まず基本例文から始まり、ついで空所補充、誤文訂正、書き換えなどの問題があり、最後に短文の和文英訳がついている。科目の名称通り、まず文法的な練習をしてから作文に入るといふ、Grammar and Compositionの語順をそのままなぞつたような教授項目の配列であつた。こうした配列であると、学習上 (生徒側) も教授上 (教師側) も利点がある。すなわち、授業に向けて予習や準備がし易く、授業の運営が円滑に運び、教える方でも教師としての面目を保つことできる。

こうした利点ゆえにグラコンは教師の間で奪い合いになったのである。

一方、英作文が教師から敬遠されたのは、和文英訳の過程で生徒側から予想外の反応がままあり、これに的確に答えるのが厄介だったからである。これは言語表現の多様性によるもので、一つの内容に対して、生徒が10人いれば10通りの言い方が出てくるのが可能になる。この多様性が、教師が英作文を敬遠する原因となったのである。もう一つの原因は、生徒が書く英文は往々にして基本的な文法上の様々な間違いを含むものが多く、これを一つ一つ訂正し納得させるのが、特定の文法項目に集中して学習するグラコンに比べて、煩雑であったことである。しかし全ての教師が敬遠したわけではない。英語表現に多大な関心のある教師は、進んで英作文を担当する傾向があり、どの高校の英語科にも英作文専門の教師が2、3人いるのが通例であった。

2. 文部省学習指導要領の変遷

ここで、日本における英語教育の根幹をなす文部省学習指導要領の変遷、それも「書くこと」にかんする扱い方の変遷を概観してみることにする。

文部省学習指導要領が戦後の公教育の指針として編纂されたのは、昭和22年（1947年）が最初で、表題は「学習指導要領 英語編（試案）」となっている。まだ新制中学校の発足前であったため、現在の中学校から高等学校まで（第7～12学年と表記された）を含むものであり、簡略化されているとは言えB5版で16頁にわたるものであった。英作文の指導項目を見てみると、「第四章 教材」の箇所に、次のように明記されている。

書き方

7年 口頭つづり方 習字 書取

8年 書取 短文

9年 複文 やさしい和文英訳

10年 作文 文法総合

11年 作文 文法総合

12年 自由作文 創作

さらに指導法の「三 書き方」の箇所をみると、次の11項目が明記されている。

- (一) 英語で答を書く方法 (Answer in English)
- (二) 選択法 (Multiple Choice)
- (三) 組み合わせ法 (Combination)
- (四) 完成法 (Completion)
- (五) 形をかえる方法 (Transformation)
- (六) 応用する方法 (Applied)
- (七) まとめる方法 (Summarizing)
- (八) 英訳する方法 (Translation)
- (九) 訂正法 (Correction)
- (十) 書き取る方法 (Dictation)
- (十一) 作り話を書く方法 (Creative work)

次に、占領下で実施された学制改革にもなつて編纂された学習指導要領は、昭和27年(1952年)発令の「中学校・高等学校学習指導要領 外国語科英語編(試案)」である。これは、前回発令のものに比べてかなり大部の内容で、中学校1年から高等学校3年までの学年ごとの指導目標、指導項目、指導方法、指導内容等を詳細に網羅しているため、B5版で180頁にもおよぶ。「書き方」に関して「高等学校における英語指導計画」の中から、高等学校1年の指導項目を引用すると次の19項目がある。

C 主として書き方に関するもの

- ・ 書取をすること
- ・ 口頭および筆記の間に答を書くこと
- ・ ヒントを得て、またはヒントなしで、思い出して書くこと
- ・ 空欄に必要な事項を記入すること
- ・ 実物・絵画・地図・図表および動作を書いて述べること

- ・ 言ってみたり、書いてみたりして、つづりを習うこと
- ・ 句読点および大文字を正確に使うこと
- ・ 略語を正しく用いること
- ・ 適当な余白をおくこと、およびその他同じような慣習を守ることを学ぶこと
- ・ 学校用の標識を作ること
- ・ はり札やさげ札を書くこと
- ・ 掲示板に掲示を書くこと
- ・ 作文練習
- ・ 日記をつけること
- ・ 手紙を書くこと
- ・ 学校新聞または雑誌に英文記事を書いて出すこと
- ・ 英字新聞を発行すること
- ・ 荒筋やまとめを書くこと
- ・ 和文英訳

以上の項目を見ると、前回の試案に比べて、この試案ではかなり実用的な項目が含まれており、GHQの要望に応える必要があったであろうことがうかがえる。当時の教育現場で上の項目をどの程度消化できたかは、はっきりとは分からないが、以後の実践（筆者の高校在学時代）から想像する限り、「作文練習」と「和文英訳」の2点に指導の力点が当てられたことは明らかである。

学習指導要領が現在のように中学校と高等学校に分かれて簡略化され大綱化されて、「目標」、「内容」、「指導計画作成および指導上の留意事項」の3項目にまとめられるようになったのは、昭和35年（1960年）の改訂からである。この改訂では、高等学校の英語が「英語A（9単位）」と「英語B（15単位）」に分けられ、教科書で見ると英語Aが各学年1冊の総合教科書、英語Bがリーダーとグラコンの2種類となり、これに1で述べた「作文」の教科書

が副読本の形で加わることとなった。改訂は以後ほぼ10年毎に繰り返され、現在は第5回目の改訂となっている。過去5回の改訂で「書くこと」の指導がどのように変化してきたか、「目標」で見えてみると次のようになる。

昭和35年（1960）

英語A： 英語の音声および基本的な語法に習熟させ、読む能力の基礎を養うとともに、聞き、話し、書くなどの実際的な能力や積極的な態度を養う。

英語B： 英語の基本的な語法に習熟させ、読む能力および書く能力を養う。

昭和40年（1970）

初級英語： 英語の文字および初歩的な語法に慣れさせ、読む能力および書く能力を養う。

英語A： 英語の文字および基本的な語法に慣れさせ、読み、書く基礎的な能力を養う。

英語B： 英語の文字および基本的な語法に慣れさせ、読み、書く基礎的な能力を伸ばす。

昭和53年（1978）

英語IIC： 事柄の概要や要点が伝わるように英語で文を書く基礎的な能力を一層伸ばすとともに、英語で表現しようとする積極的な態度を育成する。

平成元年（1989）

ライティング： 自分の考えなどを的確に書く能力を一層伸ばすとともに、英語で表現しようとする積極的な態度を育てる。

平成11年（1999）

ライティング： 情報や考えなど、場面や目的に応じて英語で書く能力を更に伸ばすとともに、この能力を活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

先に述べたグラコンの教科書が各学年使用の3分冊に分かれて出版され使用されたのは昭和40年の改訂時（1977年）までで、次の改訂には1冊にまとめられ、平成元年の改定で完全に姿を消してしまふ。平成元年と11年の目標を見れば明らかなように、指導要領にもられた内容は、コミュニケーションを志向する色彩を色濃くしたものであり、以後中学校・高等学校ともに英語教育の目標として「コミュニケーション能力の育成」を前面に掲げることになる。

3. グラコンと和文英訳の功罪

かつて日本の英語学習者は、読み書きはできるが聞き話すのは苦手というのが一般的であった。特に文法力については、TOEFLなどのテストで高得点をあげ、グラコンの成果としてそれなりの評価を受けていたが、英語を書くことに関しては必ずしも良い評価を受けていなかった。これにはグラコンのみならず和文英訳を通した学習にも原因があるものと思われる。

グラコンの主目的は英語の文法に関する知識を習得することにある。言い換えれば、「英語について知る」(know about English) ことであって、「英語を知る」(know English) ことではない。英語についての知識が増えても、英語を使って音声や文字で表現することには必ずしもつながらず、逆に英語を使って表現しようとすることに対して抑止力として働くことがある。この逆の例として挙げられるのは、長い間英語圏の生活を経験してバイリンガルとなった人たちの英語表現力である。彼らは英語の文法について知識として持っているものは極めて不十分なものであるが、英語を使って表現するときには的確に意味を伝えることができ、文法的にはほぼ完璧な英語を披露することができる。これは、彼らの英語使用の日常的な経験が、文法主体の学習者に比べて圧倒的に豊富であるからで、文法の知識に振り回される前に何かを言うことの方が大切であることを日常の体験によって認識しているからである。

同じことが和文英訳についても言うことができる。和文英訳とは、戦後最

初の学習指導要領にもあるとおり、翻訳作業 (translation) である。翻訳を専門にしようとする人にとって和文英訳は重要な意味を持つ学習となるであろうが、一般の学習者にとっては、文法学習と同じように、英語を使って表現することに対する抑止力として働くことがある。一例を挙げると、

「最近介護保険は重要だという声をよく耳にする」

という日本語を英語に翻訳する場合、「声」と「耳」の2語が抑止力として働く。「声」がvoiceではなく、「耳」がearsではないのは分かっても、これから先次のような適切な表現にいたるまではかなりの時間がかかる。

Recently I've often heard people saying how important nursing care insurance for the elderly is.

しかし、次のような英語だけでのやりとりでは、和文英訳に見られるような抑止力はほとんど働かない。

A: Have you ever heard about nursing care insurance for the elderly?

B: Yes. People often talk about it, don't they?

A: That's right. We've often heard people talk about the importance of nursing care insurance for the elderly.

日本語を与えるよりも、テーマや場面を与えて適切な表現にいたらせるほうが、英語による表現を体得するには効果的である。

4. 効果的な英文作成法

グラコン (Grammar and Composition) とか英作文や和文英訳という用語は、戦後の英語教育の歴史の中であまり良い印象を残していない。むしろわれわれが英語を苦手とする意識を持つにいたった元凶としてのイメージが強い。こうした悪いイメージを払拭するためにも、グラコンはもはや死語であるので脇に置くとして、英作文とか和文英訳という用語も、われわれの英語学習の世界から追放したい。

外国語を学習するということは、母語としての日本語に加えてもう一つ別

の言語を習得するということ、言い換えれば、日本語と外国語（本稿の場合英語）を併用するということである。併用というからには、それなりの意味がある。すなわち、英語を学習する場合に日本語と英語をそれぞれ別の回路で学習するということであって、日本語を通じて英語を学習するというのではない。別な言い方をすれば、日本語を使う時は日本語で考え、英語を使う時は英語で考えるということである。この習慣は、学習の初期の段階で身につけておくことが望ましい。

筆者が現在所長を勤めている財団法人語学教育研究所の初代所長Harold E. Palmerが考案した*Thinking in English*という方法は、初歩の段階のみならず、大学生にとっても有益である。

Q: What do you use a pen for?

A: To write.

Q: What is the difference between a dog and a beetle?

A: A dog is an animal, and a beetle is an insect.

こうしたやり取りでは日本語を介在させる必要はないし、同じような話題は日常生活の中に多数見出すことができる。さらにこうした英語による対話は常に「英語は英語の回路で」という習慣形成に役立つ。

日本語と英語を併用するという考え方に基づく方法には、別の効用もある。すなわち、英語を使用することに対する耐性（tolerance）が学習者の思考回路の中に形成されるということである。例を、農耕民族と遊牧民族の離乳期の幼児に見てみよう。遊牧民族の幼児は、遺伝的に乳糖（lactose）に対する耐性をもっており、離乳してから牛乳を飲んでも胃腸をこわす例が少ないが、農耕民族の幼児は耐性を持っていないため離乳後に牛乳を飲むと胃腸をこわす例が多いという。英語を学習するのにでき得る限り英語を使用するという環境にいる学習者は、学習過程の中で英語使用に対する耐性ができるが、英文和訳や和文英訳といった学習法に見られるように、日本語を通じて学習する学習者は、逆に、英語に対して不耐性（intolerance）を形成し、英語ア

アレルギーに悩まされることになる可能性が大きい。

日本語と英語の併用という考え方は「読むこと」においても効力を発揮するが、本稿はこちらの効用を議論する場ではないので、ここではふれないことにする。ただ、併用という考え方で英文に接した場合に、英文作成にかなりの効果があるということを示す例として、学生が書いた英文を以下にあげておく。筆者は、本年度理学部生物科学科の教育活動の一環として、ダーウィン研究をテーマとした卒業研究を担当した。週1回行われる演習では、ダーウィンの伝記や代表的な著作を、若干の日本語を交えながらも、ほぼ直読直解の方法で輪読した。最後に学生たちは、各自のテーマに従って卒業論文とその概要を英語でまとめることになったが、1年間を通じて英語の原文に触れる機会が多かった故か、無理のない英文でまとめることができるようになった。

Charles Darwin was one of the most famous scientists in human history. What makes him so famous is his theory of natural selection that explains the evolution of living things. His theory still has great influence on biology and religion. But when he was a child, his father and all his teachers regarded him as a common boy of lower intelligence than average. So I'd like to inspect how experience improved his scientific ability and how it gave him a scientific thought. (*Uncorrected*)

昔から、「英作文は英借文なり」とよく言われてきたが、この学生が書いた英文を何度かみるうちに、この駄洒落にもいくばくかの真実があるような気がしてきた。

5. おわりに

本稿は、定年退職を契機として寄稿を要請されてまとめたものである。論

文としてはまことに不備で内容に乏しい感をぬぐうことができないが、退官記念論集ということにめんじてお許しいただきたい。本稿を終わるにあたり、行川学部長をはじめ諸先生方、そして本論集の編集を担当された泉水先生に心からお礼を申し上げたい。ありがとうございました。